アナトール・フランスの幻想文学
ー異界についてー

加藤　林太郎

1

A. フランスの小説の主人公として一般に認められる人物は、コワニャール（『鳥料理レーヌ・ペドーク』『ジェローム・コワニャール氏の意見』）、ベルジュレ（『現代史』）、ブロットー（『神々は渇く』）など、作者の分身または代弁者として懐疑的意見を開陳する饒舌な高等遊民たちである。彼等の多くは合理主義者、無神論者であって、幻想世界とは無縁であり、異界の訪問者となるとは思えない。しかしここにあげた人物の中でも、コワニャールは、自称錬金術師に雇われてオカルト世界に足を踏み入れたあげく、いざこざに巻き込まれて、不慮の死をとげる。実はこれだけではない。彼の小説第一作『ジョカスト』(1879) は幽霊の物語であるし、文学界へのデビュー作『シルヴェストル・ボナールの罪』(1881) では仙女が出現する。そして 35 年後の最後の小説『天使の反逆』(1914) は『失楽園』の後日物語である。彼の作品のあるものが幻想文学と目される理由はあるわけである。A. フランスの幻想文学とみなされる作品を取り上げ、作者は異界をどこに求めるのかを考察したいと思う。

2

《『シルヴェストル・ボナールの罪』は、婆やと一匹の老猫と共に暮す老学究ボナールの学者生活を日記体で描いたものである。古典からの引用なしでは二言と喋れない教養人の自省的な日記ではあるが、一度研究資料のことと

なると情熱が沸き起こり、遠くシシリー島まで乗り込みもすれば、更にはオークションの会場で、目当ての資料を手に入れようと汗水流す。同じ建物の上階で屋根裏暮しをしている貧乏な母子に、少しでも冬を越しやすいようにとクリスマスの薪を届けさせたところ、その女性がその後玉の輿に乗って金満家夫人となり、クリスマスの薪にかこつけて、件の貴重なテキスト（『黄金伝説』の写本）をプレゼントして恩返しをする。これが小説の前半『薪』である。後半『ジャーヌ・アレクサンドル』[1] はまた別の物語であって、初恋の女性の孫娘にあたる少女ジャーヌと偶然めぐり会ったボナールが古い恋の思い出に忠実なあまり、大胆な行動に及ぶ。

知人が相続した山荘に先代の法官が残した膨大な古文書があり、ボナールはその目録作成のために故郷に近いリュザンス荘を訪れたのである。知人の才気あふれる夫人と話すうち、夫人の世話になっている孤児が初恋の女性の孫娘であることに気づく。彼女は悪後見人の食い物となっており、塾で冷遇されているのを知ったボナールは少女に面会し、少女の運命の改善に努力する。塾長の女性がボナールの学士会員という身分に関心を持って結婚を迫るのを拒絶すると少女の運命は暗転。軟禁状態となって面会できないだけではなく、掃除婦扱いを受けることになる。これを知ったボナールは少女を学校から連れ出し、未成年者誘拐の罪に問われそうになる。知人の努力と偶然の事件が重なって事は無事に終わり、ボナールは晴れてジャーヌの後見人となる。弟子の青年ジェリス君がボナールのもとでジャーヌを見初めて恋人となり、二人は結婚することとなる。孤児ジャーヌの結婚資金を作ってやるという念願を果たすためボナールは蔵書を売却する決心をするが、愛書癖やみ難く、夜中に起き出て数冊を抜きとって手元にとどめる。ジャーヌの持参金を幾らか減らしたわけであるから、これが表題の「罪」である。》

さてボナールが、十三世紀にもさか上る古文書の目録作成のため籠っているリュザンス荘の図書室の机の上へ、ちっぽけな仙女が現れるのである。「私は突然、一人の小柄な女が、いつの間に来たのか、本の背に腰掛けているの

を見たのである。ちょうどハイド・パークやブーローニュの森の女騎手が馬の上でするような格好で片方の膝を折り曲げ片方の脚を垂れている」[2] この横柄な金髪の美女は榛の小枝で作った仙女の杖を持っており、榛の実をとり出しては中身をかじり、殻をボナールの鼻へ投げつける。300 年も前に姿を消したはずの仙女が鉄道や電信のある時代に現れたのは不思議。今では子供でも仙女などこの世にいないと言っている、とボナールが言うと「知識はそらごと空想こそすべて」[3] と仙女はいい、人が私を夢見ればいつでも私は在る。ボナールを夢見る人などはないのだからあなたこそこの世に在りはしないのだ、と彼をとっちめる。ペン先をインクつぼに入れてかきまわしたかと思うとこれをボナールの鼻先へ投げつけて姿を消す。ボナールは半開きの窓の前でうたたねをしてしまい、夜風でペンも紙も飛び散って、テーブルの上はインクのしみだらけであった。

仙女の女王は合理主義の現代を代表する者として「空想力に欠けた」と自認するボナールを罰するために夢の中に現れたのであろう。しかし仙女を夢見る者にのみ仙女は存在するというのであるからには、ボナールが仙女に出会わすのは理屈に合わないとも言える。実はリュザンス山荘の話上手の美しい女主人との夕べの会話がその条件を準備してくれていたのである。夫人は長年手付かずの屋敷の客間にマロニエが床を突き破って生え出ているのを面白がるような人であった。食事の折の会話に、夫人はこの屋敷に住んでいる毒殺犯の貴女の幽霊の話をしてくれた。ボナールが屋敷のまわりの風景に感心すると、赤頭巾が木の実を拾いに行った道、仙女の馬車が通った空、紡竿が眠り姫の指を突いたという糸紡ぎのお婆さんがいた塔など、お伽噺や民謡の中の人物はこのような古い塔や木立や空から自然に生まれたのだという。何よりもボナールを驚かせたのは、ボナールが夢で仙女に出会ってから数日の後、客間でその仙女に再会したことである。ボナールが客間の棚の上に見たのは蝋人形の仙女だった。いたずらっ気もある夫人はボナールの話をよく聞いておき、折から山荘に夏の休みで滞在中のジャーヌに話して聞かせて作

らせたものであった。このように仙女物語に好意的な雰囲気の中にボナールは暮していたため、横柄な仙女の女王も特別の計らいでボナールの夢に現れたものであろう。

前年 1880 年にはゾラの『実験小説論』そして『メダンの夕べ』が現れて自然主義が新しい文学の主役として登場していた。この小説界の新顔は好意的にばかり迎えられたわけではなかったから、A. フランスのこの小説の雰囲気、クリスマス物語風の一種の奇跡物語の雰囲気は作品の成功を後押ししたであろう。同時代の科学尊重は自然主義文学の発生をうながしただけではない。教育へも圧力を加えつつあったという。普仏戦争の敗北は、プロシャの学校の理科の教師にフランスが敗れたのだと言われた。A. フランスによれば、そのような世論は子供の読み物から空想を駆逐する悪しき力となっているという。『アベーユ姫』(1883) の第 1 章で作者は言っている。「この話は今の若い諸君にはあまり取り止めがなさ過ぎて、昔の子供達にしか向きそうもありません」、なぜなら隣のお宅の 9 才になるお嬢さんの愛読書を開いてみると「いかは頭足類の軟体動物に属し、その体は炭酸石灰と結合せる緯を有する海綿状の一器官を含む」[(4)]。しかもお嬢さんはこれを面白いと言っている。私の『アベーユ姫』などとても恥ずかしくて読んでもらえないと言う。

3

《『アベーユ姫』は男女二人の子供がお城から失踪し、それぞれ別に冒険を経験した後、成人して結ばれる物語である。時代は中世らしく思われるが、所は海没する以前のブルターニュのイスの町を連想させる。アイルランドの巨人と闘って死んだブランシュランド伯の遺児ジョルジュは母が亡くなった(祈祷台の上に置かれた白いバラによって死を告げられる) とき、同じく寡婦のクラリモンド公爵夫人にあずけられ、夫人の一人娘アベーユとともに育つ。ある日二人の子供は連れ立って城を抜け出し、お城の上から遠くに見える湖へとやって来る。日は暮れて、疲れた姫は草の上に眠ってしまい、ジョルジ

ュは食べ物を探しに湖の岸辺へ降りたところ、オンディーヌ達にとらわれ湖底の水晶の宮殿へ連れていかれる。

一方姫は地底に住む小人に見つかって地底のロック王の宮殿へつれて行かれる。小人達は地下の宝石や鉱物や泉を見つけては大切に守り、勤勉に働いているが、とんぼ返りをしながらでないと歩けない。小人の王ロックは姫を愛し、何不自由ない生活を送らせるが、地上の母のもとへ戻りたい、ジョルジュと会いたいという姫の願いをどうしても許さない。姫との結婚を心に誓っているのである。夢を使って毎晩のように母と姫とは顔を合わすように取り計らうし、ついには姫を伴ってクラリモンドの城へ行き眠る姫の母も訪れる。嫉妬に悩む王は、学者小人の特殊な眼鏡を使ってジョルジュが湖底のオンディーヌの女王に捕われているのを知って狂喜する。

一方、湖底の水晶宮に暮すジョルジュは難破船から拾って来られた本で騎士道物語を読んで発奮、自由を求めてオンディーヌの女王に切りかかったため湖底の牢獄に閉じこめられてしまう。

小人のロック王は姫に結婚を申し込むが、姫のジョルジュへの思慕がかたいことを知ると、湖底への抜け道を通って捕われのジョルジュを救い出す。ブランシュランドの城へ戻ることができたジョルジュは、村人から姫の運命と地下へ通じる洞穴のありかを知ると、老忠臣フランクールを伴って地下のロック王の宮殿へと乗り込む。王は姫の気持ちを確かめると盛大な晩餐会を開いて二人を祝福する。小人のロック王が嫉妬心を抑え、自分の愛を犠牲にする物語である。》

しかし物語の主題としては異界訪問物語であろう。ジョルジュとアベーユが別々の異界に捕われるから異界も二重である。『アベーユ姫』においては地上、地下、湖底の三世界のそれぞれが独立し、断絶しているわけではなく、相互につながっている点に特色がある。異界どうしもつながっているのである。

まずロック王は客人のアベーユ姫と地上の母とを夢を用いて映像でつなぐ。

「「私はあなたをお母様の所へ連れて行くことはできないが、その代り、お母様にあなたのことをお知らせして慰めてあげるような夢を送りましょう」アベーユは涙を浮かべながらほほ笑んで、「ロックさん、うまいことを思いついたのね、でもそれよりこうする方がいいわ。毎晩お母様には私の夢を送って、私には毎晩お母様の夢を送るの」王はそうしようと約束しました。そうして約束は実行されました。毎晩、夢でアベーユは母に会い、公爵夫人は娘に会いました。これで母子二人の愛情はいくらか充たされました。」(5)

そしてついには「もう一度母に会わせて下さいまし、もし私を死なせたくないとお思いなら」(6) と言う姫を地上へ運び、城の中で眠る母に会わせる。「アベーユ姫、今お母様に会えます。（...）今夜は、あなたの姿ではなく、真物のあなたを見せて上げるのです。あなたはお母様に会えます。けれども触ってはいけません、話しかけてもいけません。」(7)

一方ロック王は特別の眼鏡を用いてジョルジュの居場所も突き止める。「ある日、アベーユがジョルジュを愛しているという気持ちがふだん以上に心を苦しめた時、王はニュールに相談しよう心を決めました。これは小人の国切っての学者で、地の奥深く掘った井戸の底に住んでいるのです。」(8) ニュールは小人の欠点も人間の欠点も同じようによく知っている学者であるが、王の望んでいるのはニュールの発明した眼鏡で、これによって王はジョルジュがオンディーヌの国にいることを知って狂喜する。なぜなら「一度入ると帰れぬ水晶の邸の中」だからである。しかしニュールによれば「その邸の虹色の塀は小人の王国に隣り合わせになっております。」(9)

王はその後ジョルジュがオンディーヌの女王を怒らせて、湖底の牢獄に押し込められたことも同様にして知るが、その牢獄は湖底の岩の上に乗っていて「その底は小人の国の一番遠い誰も行ったことのない洞窟の天井になっていたのです」(10)。王は地下の困難な旅を只一人で実行すると地下の王国の天井へ到達し、魔法の指輪で岩を崩す。このようにしてジョルジュを救い出すと、地上へ登るために小人によって作られた階段からジョルジュを送り出す。

彼は城から遠からぬ石切場跡へと出たのであった。城へ戻ったジョルジュが老忠臣を伴って地下のロック王の宮殿へ現れ、姫との再会を果たしたことは先に述べた通りである。王は祝福の贈り物としてさんらんと光る魔法の指輪を帯から取り出す。「アベーユ姫、この指輪を私の手から受け取ってください。これさえあれば、あなたとご主人とお二人は何時なんどきでも小人の国へ入りなさることができます。来られたら歓迎して何でもお力になって上げます。」(11) かくして交通の自由は保障された。

ロック王が治める小人の王国は王様はじめ家来達の誰もがモノシラブの名前（ピック、タッド、ディッグ）である点、いかにも異界らしい雰囲気を持ってはいる。その地下の王国がやがて異界であることをやめてしまうのは、ロック王の人間の少女への恋愛が原因というよりは王の政治上の意図が原因であろう。小人と地上の人間は小人によれば同等ではない。小人はいろいろの石の効能も知っていればまた金や銀をこしらえ出したり泉を見つけたりもする。つまり「人間よりも上等」(12)「人間よりも立派」(13) なのである。「何しろ人間ていうものは小人たちよりも頭が悪く、小人ほど物をしらない」(14)。学者ニュールによれば「生きるためには働かなければならぬ定めになっているのに、人間はこの神聖な掟にそむいて、我々のように喜び勇んで働くどころではなく、仕事よりも戦争をしたがり、互いに助け合うよりも殺し合う方が好き」(15) であるからだ。人間の中には小人達の頼みごとを邪険に断ったがために乞食にされてしまった金持ちの女もいる。「よい生き方を覚えるためには人間は命が短か過ぎるためだ」(16) とニュールは考えている。ところでロック王は高邁であって、小人達の人間に対する優越を意識しながらも平和主義的なのである。「ロック王のアベーユに対する愛情は僅かの間にぐっと強くなっていました。もう心の中では姫が年頃になったら結婚して、その力で人間と小人との仲を好くさせたい」(17) と思っている。姫を野獣なみに檻に入れたがっている小人のリュッグとは大ちがいである。姫との結婚は果たせなかったが、地上へ帰る二人に向かって王は言う。「やがてあなた方にお子さ

んが出来たら、どうか教えて上げてください。地面の下に生きている無邪気な、働きものの小人たちを軽蔑しないようにとね」[18]

このようにして地上と地下の小人の王国とはすっかりつながったのである。では地上の世界と地下の小人のロック王の国は何の違いもない、ひとつながりの世界なのであろうか。そうではないであろう。アベーユ姫への愛を抑えジョルジュへの嫉妬を断ち切り、二人の結婚を祝福してやるロック王は、A. フランスの恋愛者の中では例を見ない存在である。愛を抑え得ず、嫉妬を断ち切れずに苦しむ恋愛者しか彼の作品の中にはいないと言ってよい。パフニュスのような修道者、ガムランのようなジャコバン党員も少しも例外ではない。自己犠牲は A. フランスの恋愛者には不可能であろう。その自己犠牲の美徳の発揮されるのを見るロック王の地下の小人の国は、反転した世界、れっきとした異界であるかもしれない。童話として情念が弱められているのでなければ。

4

A. フランスの作品に異界が存在するとすれば、それは異教的古代世界である。新しい宗教によって邪神として抹殺された異教の神々、野や山や泉のニンフ達はどのように流亡の境遇を続けたのかが、A. フランスの短編のある部分を占めるのである。彼等の住む異域は残存する非キリスト教的異界と呼んでもよい。

作者は山野の異教神たちが神の威光によってことごとく姿を消したとは考えなかった。そうした古い神々の生き残りのドラマを語ったのが『アミクスとセレスタン』(『螺鈿の手箱』1892)[19] である。《復活祭が近づくと、冬の間は静かだった森にも泉にも、聖水と聖ヨハネの福音書で追い払われたはずの妖精達が帰ってくる。木々の茂みは小さな彼女達の姿で一杯になる。無数に住まう異教の神々を追い払おうとする隠者の努力もなかなかに報いられない。と隠者セレスタンは森の小径で羊の足を持った牧羊神の一人に出会うが、この若い牧羊神は十字を切ろうとする隠者をとどめて復活祭をともに祝いたいと申し出る。このアミクスと

名乗る田野の神は、隠者は年をとった牧羊神であると見て彼に親しみを示し、復活祭の準備をいそいそと手伝うのであり、花々を集めて祭壇に戻ってきたアミクスはあたかもさんざしの茂みが歩いてくる様に見えた。しかし隠者がミサの供物を奉っている間、山羊の脚をした男は、角の生えた額を大地にすり寄せて太陽を礼拝する。この日からセレスタンとアミクスは生活を共にしたが、隠者はどうしても主の秘蹟をこの半獣神に理解させることはできなかった。だが真の神の礼拝堂は常に山や森や水辺の花をもってにぎやかに飾られるのであった。二人は田野の住人達の無知からともに聖者として祭られるに至る。》

『聖サティール』(『聖女クララの泉』1895)[20] は上記作品の後日物語とも言える。《ここには貧しいフランシスコ教団の修道士の誘惑が物語られており、彼のために異教徒の墓からサティールやニンフの亡霊の群れがあらわれ、ニンフは彼の悪夢の中で歯の抜けた醜怪な老婆に変じる。何日間かこの幻覚に悩まされた修道士は、遂に聖サティールの亡霊と出会うが、彼の口から花咲く野にたわむれるニンフたちの魔女への変容について教えられる。「神々も歳月の打撃を感ずるものなので、世紀と共に、取り返しのつかぬ破壊の方へと赴いて行くものじゃ。ニンフ達も人間の女共同様に年はとる。(...) どんなニンフでも魔女にならぬものはないのじゃ」[21]。この聖サティールなるものは、初期のキリスト教徒と生活を共にし、これを助け、これに仕えたサティールで、その死後に建てられた墓は、幾千万の異教の森の精や、もみがらのように小さく軽くなった忘れられた神々の聖殿となっていたのである。》伝道者や修道士は勝者たる新宗教の代表として、新しい信仰と古い信仰の密やかな合致あるいは神々の痛ましい変容に立ち会っているのである。

この異界よりの訪問者である魔女（変容したニンフ）と修道士の関係は愛着でもあり対立でもあってあいまいである。「私達の泉を濁したり、私達の樹木を打ち倒したり、私達の山を切り拓いたり、残酷な男達に私達の幸福な隠れ処の秘密を明かしたりするためにやって来た仇敵じゃないかどうかたずねてみましょう。」[22] と言い交わしつつ駆け寄って来る間にみるみるニンフは魔女になる。詰

め寄って来た魔女の一人は言う「まあ！　かわいい色男だね」[23]。すぐ殺してしまおうとする他の魔女をおしとどめて、お尻をひっぱたいて軽く懲らしめてやるだけでいいことにしてくれる。とげのついた枝の束で彼を打ち据え、秘密を洩らせばその時は殺すというおどしの文句を告げた上一人一人修道士に小便を浴びせると聖サティールの墓の中へと消える。真面目な修道士フラ・ミノはこの異変を司教に報告したため聖サティールの墓は開かれ、悪魔祓いの式が行われる。その夜魔女は復讐のために再びあらわれることになる。フラ・ミノの遭遇した事件そのものが、作中、老牧神の語る長い異教衰亡史の一挿話なのである。

この魔女達はほぼ同じ「風習」を保ったまま『森の眠り姫の供をして百年間眠ったシコーニュ公爵夫人とブーラングランの物語』（『青鬚の七人の妻』1909）[24]にも登場する。《森の眠り姫のお城には、仙女の予言を信じない一派がいて、財務官ブーラングランもその一人である。「ルクレティウスの流れを汲み、エピクロスとガッサンディの教説に深く浸った」[25] 彼は仙女の存在すらも信じない立場である。そして仙女不在論（アフェイスム）を主張しつつ姫とともに百年の眠りに落ちるが、長い眠りから目覚めても仙女の存在を否定し続ける。》

このブーラングラン氏が愛人である王妃付き女官長シコーニュ公爵夫人をたずねる途中、夜の沼沿いの道の四辻（一種の魔界）で三人の若い仙女に出会う。仙女たちは彼を取り囲んで踊るので、彼は眼を回して倒れそうになる。数歩先で彼は今度は三人の乞食婆さんに出会う。杖に寄りかかった婆さん達は、「かわいい人、恋人、大事な人」などと彼を呼んでさかんに撫でさするが、彼がお相手できないのを見て取ると、罵言を浴びせかけ、杖でなぐり、足で踏みにじった上、皆で小便をかけて立ち去って行く。古代神を敵視し、警戒している修道士フラ・ミノと異なり、合理主義者の財務官は特別な敵意もなく仙女にも会うし、魔女にも会うが、やはり罰せられる理由はある。仙女に出会って痛めつけられてもまだ仙女の存在を信じない人だからである。仙女（罰を与える時はふつう魔女）から与えられる罰の程度も、フラ・ミノほどではないにしても、ボナールよりは重いと言ってよいであろう。

5

到達不可能な秘密の国は意外にも自伝の中に語られているのである。ところで自伝には、作者の現実的客観的な体験のみが語られているのではない。子供の空想的神秘的な半内的体験もまた市民権を有している。

グリーン少年は、家の中に怖い所がいくつかあったらしい。母さんが家族の服を詰め込んでいた衣装戸棚が内に秘めている恐ろしいものを七才の彼は発見する。ある日のこと、抑えがたい好奇心に駆られ、両親の部屋にある衣装戸棚をいきなり開け、胸をときめかせながら、悪魔を呼んでみた。そこに悪魔がいると彼は実際に考えていたのだ。「最初はなにも起こらなかった。戸棚の中は暗くて、お互い顔のないのっぺりした群衆のように押し合わされた服の長い列が、非常にぼんやりと見えるだけだった。もっと呼んでみようか？　少なくともそれはやらねばなるまい。それも二度では不十分だ。三度は呼ぶ必要があるし、呼ばねばなるまい。そこで私はもう一度呼んでみた。すると忘れがたいことが持ち上がった。服が動いたのだ。静かに服同士がわかれ、だれかに道をあけたのだ。今でも私は、わめきながら逃げ出すかわりに、どうして待ってみる勇気がなかったのかと残念だ。私は母の腕のなかに逃げこみはしたが、母のほうは、なぜ私が叫んだのかもわからなかった。」(26)

A. フランスの自伝の一冊『小さなピエール』(1918) の『未知の国』(27) は、自伝四部作を通して最も美しい一章ではなかろうか。

《幼いピエール（アナトール・フランスのこと）はメラニィ婆やにつれられて散歩に出かける。よちよちと歩く婆や、小さな足のピエールの二人づれであるからそんなに遠くまでは行かない。テュイルリーやリュクサンブール、暖かい季節にはトロカデロにまで足を伸ばす。小さなシャベル持参であるからプラタナスの幹が落とした皮で箱庭を作って遊ぶ。しかし、ある未知の国があってピエールを誘ってやまない。「私が他のどこよりも一層入り込みたいと思ったある国、ある瞬間にはほとんど達したと思うのだが、決して到達することのできない一国があ

った。私はその国に就いては、全く知らなかった。只、それを見れば、これが目的の場所だと分かる確信はあった。(...) 私は熱心にそれを発見したいとのぞんでいた。私が手を届かせることはできないが、すぐ近くにあるその国」。それは信心深い母が教えてくれた神聖な国ではない。父なる神、キリスト、聖母マリア、天使、聖者達、、はふだん見つけていて何らの神秘も持っていないのである。「私に激しい好奇心を起こさせた世界、私の夢想の世界は、未知の、小暗い物を言わない世界であった。その世界のことを考えただけで、私に恐怖の激しい歓喜を感じさせるのだった。私は、その国に達するためにはひどく小さな足を持っていた。そして、私がそのスカートを引っ張った老メラニィは、よちよちと歩く人間だった。しかし、私は落胆しなかった。何日かは私の欲望と私の恐怖が求めていたその国に入り込みたいものだと望んでいた。ある瞬間、ある場所で、私はもう二三歩進んだら、そこに達せられるような気がした。」[28]》

帰途につこうとしているメラニィ婆やの着物を引き裂かんばかりにして引き戻す。目に涙をためた婆やに「もう一歩だよ、私たちは、無名の帝国に踏み込めるのだ[29]」と叫んでも理解してもらえなかったであろう。ところが彼の知っている地点がいくつかあって、未知の世界に接しているのだ。「その世界が私たちの世界に接している二三の点を知っていると信じていた。そして、それらの仮定された境界は、皆私の住んでいた場所からあまり隔たってはいなかった。ただ、私はその異常さ、そのわくわくする魅力、それにより私に与えられた恐怖の入り混じった好奇心によって初めてその境界を認めたのであることを知っている」。その一つはダンフェール広場にある「石造りの女達のいる二軒の家」の向こう。もう一つはテュイルリー公園の中、水辺の築山の下の寒い穴倉、「そこには、一匹の蛇が腕にまつわりついた白衣の女性が眠っている」。さらには住んでいた家の地下室のわらじ虫が這い、錠前の錆びついた一つの扉が彼の眼を不安がらせた。まだある。「私の寝ていた室の中で、時々、床の割れ目から、色々なな形のものが上がって来た。色々な形のものと言えなければ、色々な幽霊、色々な幽霊と言えなければ、私を恐怖に戦かせ、手近にあるが、近寄れないあの世界からのみ来

ることのできる色々な人を動かす力が上ってきた」。

「メラニィ、私に未知の国の話をしておくれよ」。メラニィは微笑した。「坊ちゃん、私は未知の国の話なんか知りません」[30]。

リュクサンブールのベンチに座って、編物をしているメラニィとピエール少年との間にこの様なやりとりがあったという。この時こそ、作家になるはるか以前の作者は、作り物でない本当の異界を求めていたのだと思ってまちがいない。

6

アナトール・フランスの小説の恋する女性主人公は往々にして、嫉妬に燃える幽霊のために幸福を妨げられる。『ジョカスト』のエレーヌは亡夫の幽霊によって自殺へ追いつめられて行き、『楽屋裏の話』(1903) のフェリシーは、捨てられて自殺した元の愛人の亡霊によって、新しい恋を破壊されてしまう。一方この作家が本領とする諷刺小説は最も幻想文学として分類されやすい。『ペンギンの島』(1908) では、氷島のペンギンが雪と氷のため半盲となった伝道熱心な聖者によって洗礼を施される。対応に困った神様がペンギンを人間に変えることで事態を解決される。この人間化したペンギンの国の歴史を語るという形でフランス史が戯画化されるのである。『天使の反逆』は、図書館で神学書、哲学書を研究した守護天使が懐疑に陥り、やがて反逆の決心を固めて多くの天使達と天国制圧を目論む物語である。荒唐無稽な外観のもとに、同年発表のジイドの『法王庁の抜け穴』にも見られる、同時代の信仰復活の風潮を愚弄する意図を持っている。作者固有の作品領域の夫々に幻想的手法は可能性を提供しているのである。しかし本論で扱った仙女、ニンフといった異界からの訪問者、地下の小人国の住人などは、ペンギンや天使たちのように早々人間界に同化したりはせず、異界性を保った登場人物と言えよう。なぜなら、ボナールや眠り姫の財務官に現れた仙女は、想像力蔑視の現代に対して、またフラ・ミノに現れた魔女たちは、牧歌的世界を亡した新しい宗教に対して、いずれも怒れる精霊たちだからである。

幼い A. フランスが、セーヌの岸の辻や庭で異域に遭遇する気でいたのは微笑ましいが、恐らくこれは、オスマンの改造以前の、異域が残る、古いパリの思い出にほかならないことが感じられる。さらに自伝第一作『我が友の書』(1885) が、夜になるとベッドと壁の間に現れる「怪物たち」との出会いを語ることから始まるのを我々は知っている。A. フランスの幻想文学の中に、自伝もまた数頁を加えることが出来るのではないだろうか。

使用図書

Anatole France : *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard Ⅰ, 1984; Ⅱ, 1987; Ⅳ, 1994.

Anatole France : *Œuvres complètes illustrées*, Calmann-Lévy Editeurs, Tome XIX, 1930.

Julien Green : *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard. Ⅴ, 1977.

注

(1) Ⅰ－pp.199-313.
(2) Ⅰ－p.208.
(3) Ⅰ－p.212.
(4) Ⅰ－p.648.
(5) Ⅰ－pp.674-675.
(6) Ⅰ－p.683.
(7) Ⅰ－p.684.
(8) Ⅰ－p.688.
(9) Ⅰ－p.690.
(10) Ⅰ－p.694.
(11) Ⅰ－p.711.
(12) Ⅰ－p.673.
(13) Ⅰ－p.687.
(14) Ⅰ－p.683.
(15) Ⅰ－p.689.
(16) Ⅰ－p.689.
(17) Ⅰ－p.674.
(18) Ⅰ－p.711.
(19) Ⅰ－pp.891-895
(20) Ⅱ－pp.571-589
(21) Ⅱ－pp.584-585.
(22) Ⅱ－p.574.
(23) Ⅱ－p.575.
(24) *O.C.*, Tome XIX, pp.217-241.
(25) *O.C.*, Tome XIX, p.226.
(26) Julien Green : *O.C.*, Ⅴ (*Partir avant le jour*) p.655.
(27) Ⅳ－pp.892-897 (*Le monde inconnu*)
(28) Ⅳ－p.894.
(29) Ⅳ－p.895.
(30) Ⅳ－p.896.

(文学部名誉教授)